

三橋新会長のもと千葉県歴教協のさらなる前進を!

榎澤和夫(事務局長)

去る9月8日、千葉市中央コミュニティーセンターで、第47回総会が開催されました。会員20名(昨年18名)が参加し、約4時間にわたり活発な議論が展開され、事務局提案の議題はすべて承認されました。4月以降、全国大会千葉大会の取り組みに合わせて、千葉県歴教協の新体制づくりを進めてきましたが、今回の総会で加藤公明会長(日本史部会)に代わって、新たに三橋広夫副会長(千葉支部)が新会長に選任されました。

総会では、今後検討していかななくてはならない課題がいくつか出されましたので、その課題を中心に報告します。

1. 安房集会(2月23日～24日)への結集を

全国大会千葉大会のプレ集会和位置づけて取り組んだ、1月の千葉集会(於:千葉大学)では150名を超える参加者がありました。これは前回の全国大会千葉大会が開催された1994年に次ぐ参加者数であり、14年ぶりに千葉県で開催される全国大会に向けての取り組みが成果となって表れました。しかし参加者動向をみると、参加者増加の要因は学生・院生の参加者が増えたことにあります。昨年の松戸集会では参加者約100名のうち、学生・院生の参加者が25名でした。今年の千葉集会では学生・院生の参加者が61名(スタッフとして参加したボランティアは46名)であり、参加者全体の40%を占めるまでなっています。これは、大学教員である千葉県歴教協の会員が、積極的に学生・院生に声をかけた結果ですが、これから教員になろうとする学生にとって、歴教協が進めている地域の掘りおこしや教育実践活動が魅力的であったからだと思います。今後も千葉や船橋など都市部で開催する場合は、学生・院生が多数参加することがみこまれます。学生の参加を念頭に置いた運営が求められていることが確認されました。

来年の第46回千葉県歴史教育研究集会(以下、安

千葉県歴教協の集大成が 1枚のDVD(2012年改訂版)になりました

このDVD(「わたしたちの歩み 2012年改訂版」)は、私たち千葉県歴教協の1954年からの、およそ50余年にわたる歴史と言っても過言ではありません。千葉県歴教協の会員であつても初めて見る会報や会誌および『100時間』『100話』など絶版の書籍を集録することができました。

私たちは、21世紀を迎えながら、歴史教育・社会科教育のために、地域や子どもたちに根ざした活動をさらに続けていこうと考えています。そのためにも、過去に、千葉県歴教協の会員たちが何を語り、どのような実践を積み重ねてきたかを知らなければならぬと考え、DVDを製作するに至りました。

全国のなかまたちとともに、私たちの活動をふり返り、財産となることを期待しています。

このDVDをご希望の方は事務局までご連絡ください。1枚千円です(郵送料含む)。(M)

房集會)は、館山市(会場:館山市立富崎小学校・安房自然村)で2月23日(土)～24日(日)に開催されます。開會集會は、地域にねがず活動を長年続けてきた安房支部ならではの企画です。館山の地域づくりに取り組んできた方々がパネリストになりシンポジウムを行います。コーディネーターは池田恵美子さん(安房支部・NPO安房文化遺産フォーラム事務局長)が担当します。また、分科会は1日目の午後と2日目の午前に分ける形になります。そして2日目の午後は、地域づくりの実際を見学するフィールドワーク(バスツアー)です。なお1日目の午前中にも会場近くの「布良」を歩くフィールドワークが予定されています。

この安房集會を郡部で開催する県集會のモデルケースにしたいと考えています。都市部開催と違い、学生・院生の参加があまり望めない状況のなかで参加者確保にどう取り組むのか、これが最大の課題です。

2.『おはなし千葉の歴史』の普及を

全国大会千葉大会を記念して出版した『おはなし千葉の歴史』(岩崎書店)が、大会期間中だけでも126冊も売れています。この状況を見ても、今後かなりの需要が見込まれます。図書館や公民館などへの購入の働きかけや、小・中学校では地域学習のテキストとして複数冊の購入を勧めるなどの取り組みをしていくことが確認されました。さらに支部例会の学習会のテキストとして活用することや、小・中学校の教員向けに具体的な活用例を示した指導案づくりも提起されました。歴教協会員が購入を希望される場合、定価1890円のところ2割引きで購入できますので、事務局までご連絡ください。

宮原武夫さんがまとめた『千葉県歴史教育者協議会58年の歩み』を全国大会千葉大会参加者全員に配付しました。1970年代の安井俊夫さんの「共感」を媒介にした授業実践と松戸支部の活動、80年代以降の加藤公明さんの討論授業と日本史部会の活動、1975年と1994年の全国大会千葉大会の成果と課題、そして船橋・習八・安房支部などが精力的に取り組んだ地域の歴史の掘りおこしの活動など、1954年の千葉県歴教協の創設から現在に至るまでの「歩み」がたどれるようになっています。『おはなし千葉の歴史』同様、支部活動に活用していくことが確認されました。

3.教科書問題に組織的な対応を

昨年の夏は中学校の教科書採択が話題となりました。千葉県の公立学校では自由社版・育鵬社版教科書は採択されませんでした。横浜市や東大阪市などで育鵬社版が採択され、歴史・公民とも前回の10倍以上の採択数となり、今後の動向が注目されていました。千葉県では15の採択地区に分かれています。教育委員の交代などで次回の教科書採択では予断を許さない状況になっています。

このような状況の中、この夏、学校単位で採択している高校の教科書に教育委員会の不当な干渉が行われました。千葉県歴教協の会員が執筆している実教出版の『高校日本史A』に対して、東京都教育委員会が採択をした4校の校長に圧力をかけて違う出版社の教科書に変更させました。『高校日本史A』は国旗・国歌法をめぐる本文記述の側注で「政府は、この法律によって国民に国旗掲揚、国歌斉唱などを強制するものではないことを国会審議で明らかにした。しかし、一部の自治体で公務員への強制の動きがある」と記述しています。教員への強制を行っている東京都教育委員会が採択にあからさまに介入した事案です。

また、横浜市教育委員会も『高校日本史A』の「日本の侵略加害の事実を記述する教科書を「自虐的」と非難する立場の人々が執筆した教科書があらわれたことなどに対して、アジア諸国からも強い批判がおこった」との記述を問題視し、横浜市内の高校9校中4校が採択していたにもかかわらず、教育委員会の事務方が勝手に山川出版の教科書に変更して教育委員会の会議にかけ採択したという暴挙にでています。横浜市教育委員会は「育鵬社版を中学校で学んでいる生徒が嫌な思いをする」という理由にならない理由をあげて、自らの行為を正当化しています。

千葉県歴教協は「教科書ネット」との連携を深めることを提起していますが、会員の個人的なかかわりに限定されていました。総会ではこのような状況を踏まえて、千葉県歴教協として組織的に係わっていくことの必要性が提起されました。

4. 「なかま」を増やす方策を

千葉県歴教協最大の課題は会員拡大です。会員数はここ数年漸減状態が続いています。財政は会員数が減少していくのにもなって、財政規模を縮小してきたため黒字ですが、そのまま減少してくると千葉県歴教協の運営自体に支障がでる恐れがあります。歴教協本部では若い会員を増やす方策として「U25会員制度」を設けました。原則25歳以下の学生は年会費を5000円にするという制度です。県集會に多くの学生・院生が参加している状況を会員拡大に結びつける方法を考えると同時に、若い教員の採用が増えているにもかかわらず、それが会員増につながらない状況を打ち破る方策も提起したいと考えています。

総会で三橋新会長が選出されましたが、来年度に向けて事務局、県委員人事も検討する予定でいます。三橋新体制のもと山積している課題をひとつひとつ解決していきたいと考えています。最後になりましたが、千葉県歴教協の会長職の重責を担われてきた加藤公明さんが退任することになりました。長い間ありがとうございました。

会長に就任して

三橋広夫(千葉支部)

思えば、小島さん、宮原さん、中山さん、秋葉さん、加藤さんについて、千葉県歴教協会長も私で6代目になる。1954年に発足し、1967年に再発足した千葉県歴教協は120名以上の会員を擁し、研究集会、たのしい社会科交流会、地域と民衆の歴史を学ぶ講演会、秋の歴史見学会といくつもの行事を開催しながら、子どもと地域に根ざす歴史教育を訴えてきた。その原動力は支部活動にある。異なる校種の教師ばかりか、地域の人々までが真剣に歴史の授業を考えると支部活動の力の源がある。その中から、宮原実践、安井実践、そして加藤実践と全国のなかまに次々と斬新な実践を提起してきた。

そして、今回は3度目の千葉大会を成功させることができた。このエネルギーを日常の支部活動に生かすにはどうすればよいのか、各支部で方針をたてて、活動をくり広げてほしい。そして、若いエネルギーを支部に迎え入れ、これまで培ってきた地域や子どもとのとらえ方などを彼らといっしょに吟味していくことが県歴教協全体の課題であるように思う。

□千葉大会分科会感想

「授業方法」分科会

時田朋子(日本史部会)

全国大会への参加は今回で3回目であるが、初めて授業方法分科会に参加した。この分科会は小学校から大学まで様々な校種の実践が聞けることがよい。特に小学校や中学校の実践は、どのような学習を経て生徒たちが高校へあがってくるかを知る意味で大変勉強になる。発達段階に応じたアプローチ、生徒の実態に応じて組み立てた授業、地域に目を向けさせる授業、どれも報告者の思いが感じられる授業で大変勉強になったし、自分も頑張ろうと励まされた。

分科会での報告は10本であった。その中からいくつかの実践を紹介したい。奈良の武田さんの「文化財は誰のもの?(中)」は文化財は「人類共通の宝」か「元の土地に返還」をすべきものなのかを生徒に考えさせる実践である。武田さんは現代社会における国家や民族のアイデンティティの問題について生徒の認識が深まることが大事であると言っていた。この実践に対して、奈良の

文化財が東京の博物館で展示されていることをどう考えるかというふうに身近な例とからめて考えさせてもいいのではないかという意見や文化財にこだわること自体が帝国主義にからめとられているといった意見があった。

大阪の井ノ口さんの報告は「福島原発事故後、改めてヒロシマ・ナガサキを教材化する(大)」である。前日に高橋哲哉さんの講演をきいていたこともあって、テーマ実践内容ともに興味深かった。ほとんどの学生が原発に対する基本的な知識さえもっていない状態から、講義や議論を通じて、今後の原発にあり方を考えられる知識を得、原発について学び考えることの必要性を感じとれるようになった。講義の後は脱原発が増えるが、しばらくすると脱原発を支持する生徒は減っていくという。今後自分の意見がぶれることがあってもその都度考え続けられよう。原発の問題は私たちの生き死に関わる大きな問題であるから、メディアに流されることなく、自分自身がこの問題と向き合い、どのような問題点があるかを理解した上で、原発に賛成・反対を表明できることが大事であると感じた。

埼玉の川島さんの報告は「地域は天井のない学校(高)」である。生徒が足をつかって地域の歴史に触れる学習の報告であった。小中学校に比べて高校の学習では地域の歴史に触れることがほとんどないと川島さんは言っていた。地域の歴史に学ぶことは、歴史を肌で感じることができ、地域の人々との交流が財産にもなるし、とてもよい歴史の学びだと感じる。

千葉の三橋さんの「昆布から見ると江戸時代—2年間にわたって追求した子どもたち」は、完成度が高く、実践報告の仕方も大変すばらしかった。子どもたちの認識がどう深まったかがきちんと記されていて、子どもたちが楽しみながら昆布の謎に迫る姿がよく伝わっていたと思う。この報告を聞くのは3回目であるが、初めて聞いた人にも子どもたちの生き生きとした姿がイメージできると思う。どんなに優れた実践であっても、実践報告から子どもたちの生き生きとした姿が読み取れなければ、意味がない。実践に力を入れるだけでなく、実践の報告の仕方にも工夫が必要である。

私の報告には5人の方たちが意見や質問を寄せてくれた。特に愛知の久保田さんからいただいた意見は、じっくり考えたい話だと感じた。「できるだけ子どもの考えたいテーマで討論させたい。そうしないと社会性が育たない。発言がパフォーマンスになってしまう怖れがある」とはどういうことであろうか。分科会終了後お話ししたが、後日この意見に関する論文があるからということで、手紙が届いた。それを読んで私はこのように理解した。生徒は自分の意見ではなく教師に認めてもらうために教師の考える答えを言おうと必死になる。討論では代表意見に選ばれると次回も代表に選ばれたいがための意見を形成する。それでは本末転倒で、このことが発言がパフォーマンスになることにつながるのではないかと思う。たしかに、勤務校の生徒たちは自分の意見を書ける子もいるが、正解を書こうとする傾向もみられるのである。生徒の本音を引き出すこと、生徒が本音で語れる授業や討論をするために、普段の授業や生徒との関わりが重要になってくるのだと感じた。

「父母市民の歴史学習」分科会の感想

宮原武夫(船橋支部)

8月4日午前

①船橋 本中山歴史サークル「ともにみて学んで考えて行動を」佐藤尚子・小川

②千葉 武田文治「『土気地区の歴史散歩』のあゆみから」

③佐倉 山倉洋和「小見川藩主・初代佐倉城主土井利勝の新たな人物像」

8月4日午後(宮原は特設分科会「日韓歴史教育交流」に参加)

④茨城 都留孝子「市民は放射能問題・東海原発問題に今どう取り組んでいるのか」

⑤長野 佐藤喜久雄「歴史に学び、生きる—原発・義勇軍・治安維持法—を考える」

8月5日午前

⑥船橋 光瀬洋一郎「船橋の近現代史学習会」

⑦神奈川 橋本清貴「2011年、川崎における中学校教科書採択と3年後も『つくる会』系教科書を採択させない取り組み」

⑧岐阜 加藤庄一「まっしぐら―歴教協と歩んだ40年―」

8月5日午後 全体討議

今年の『大会要項』によれば、この分科会は、団塊世代の会員の退職期を迎え、退職後にさまざまな職業の人とともに学び・教える機会が増えて、「父母市民の歴史学習」分科会の役割が重要になっていると位置づけられている。その上で、今年の報告を3分類して、(1)①②③が歴史を学ぶサークル活動、(2)④⑤が原発被曝、(3)⑥⑦が教科書問題に区分された。しかし、船橋支部から提出した⑥は、教科書問題の報告ではない。大会要項(レポートカード)を読めば、教科書採択問題は近現代史学習会の成立の契機であって、報告の主題は学習会の運営方法にあること、報告者は学習会の講師ではないことがわかったはずである。

船橋支部が提出した①と⑥は、ともに学習会の参加者が作成した報告である。①は、志村毅一さんを講師に、公民館活動として年間計画に基づきながらも、ジャガイモの世界史、インカ帝国・ヨーロッパ・日本、武田信玄、映画「影武者」、村の自衛・自治、戦争・核、日本国憲法と、実に自由な発想での主題の選択が続く。⑥は逆に『近現代史を読む』をテキストに、宮原が講師で、学校の授業のように時系列に沿って進む学習会である。②③は学習会・見学会の講師による報告である。

従来のこの分科会は、学習会を組織している歴教協会員が作成した報告に基づいた討議が多かったように思う。これに対して「子どもが主役になる社会科の授業」をめざしてきた千葉県歴教協の船橋支部は、参加者が主役になる学習会、参加者が主役になる報告づくりをめざした。その意味でも、①と⑥は、当然いつしよに報告・議論されるものと期待していたが、期待は裏切られた。⑥が教科書問題の報告に分類され、①とは別の日に報告したために、1日目に参加した本中山歴史サークルの15名と、2日目に参加した近現代史学習会の5名とが意見を交流する場はなかった。船橋支部のこの分科会に対する問題提起は、世話人にはまったく通じなかった。近現代史学習会との交流を楽しみにしていた本中山歴史サークルの15名は、発言する機会もほとんどなく、不満を残して帰った。近現代史学習会からの参加者も同じである。事前の根回しをすればよかったのかもしれないが、その点、世話人はわかってくれると思っていたのが甘かった。

世話人は、ただ提出された報告を分類するだけでなく、それをこの分科会の課題と結びつけて、どのような成果を生みだしてゆくのか、配慮してほしい。例えば、②の武田報告は、第1分科会「地域の掘りおこし」に提出した場合と、この分科会に提出した場合とでは、それぞれの分科会が明らかにしようとしている課題が異なるから、討議の仕方が違うはずである。しかし、現状のように、分科会の課題とは別に、報告内容・形式を分類して時間を割り振るだけでは、分科会の特色が消え、どの分科会に出しても同じような討論になってしまい、分科会の独自の成果の積み上げはできないのではないかと。

「父母・市民の歴史学習」分科会は、1980年の第32回神奈川大会で「地域と教育運動」分科会から分かれて新設されたものである。歴教協の会員で、退職後も父母・市民の歴史学習会を組織している人が増えているのに、そこでの経験や問題を交流する場がなかったからである。新設当初の討論の課題は、(1)父母・市民の歴史意識の現状と課題は何か、(2)父母・市民の歴史認識と子どもの歴史認識のちがいは何か、(3)父母・市民の歴史学習の課題と方法は何かであった(『第32回大会要項』)。この課題を掲げてから32年が経過したが、この課題にそくして何を明らかにし、何を成果として蓄積してきたのであろうか。

第32回大会の分科会報告は、神奈川の渡辺賢二「市民と学ぶ地域の歴史」、千葉の西沢文子「関東大震災時の朝鮮人虐殺の真相ほりおこし」、宮原武夫「母親の歴史学習から学ぶこと」の3本で、神奈川・千葉・埼玉などから32名が参加した。その80%以上が初参加者であり、教師以外であった(『歴史地理教育』312号)。

そこでは、課題(2)に関して、母親の歴史の学び方は、自分の生活と地域に結びつけて自分の経験を語ることといっしょである。ところが中学や高校では、学習の主体は教師と教科書で、子どもの疑問やつぶやきは無視されがちである、という指摘があった。今年の分科会でも、講師主導の②③報告と参加者主体の①⑥報告とをそれぞれいっしょに議論できたら、それぞれの長所・短所を比較できたとし、会員外の参加者の発言の機会をもっと多くなったのではないかと。また、大会要項の冒頭に示されていたこの分科会の役割の重要性も、抽象的な言葉だけでなく、具体的な内容で肉づけできたのではないかと思った。

この分科会は、2002年の三重大会で第8分科会「地域の現実と教育運動」と第17分科会「地域の中の子どもたち」との半日の「地域合同」分科会を行ったのをきっかけに、2004年の第56回山形大会から2007年の第59回神戸大会まで、「地域・子ども・教育運動」分科会として合併され、全体会と分散会の形で運営された。そして2008年の第60回東京大会から再び3分科会に分かれて運営されている。三つの分科会が、なぜ合同し、なぜまた分散したのか、その間の成果は何か、『歴史地理教育』の大会報告集には記録されていない。

今、歴教協運動は何をめざしているのか、その中で各分科会は何を分担すべきなのか、大会での基調提案と分科会運営の関係について議論を始められないものだろうか。

なお、『千葉大会・要項』について。①の佐藤尚子さんは、歴教協から大会要項の原稿依頼を受けていなかった。それにもかかわらず自分の名前で、題名も内容も異なるものが掲載されていた。この点について佐藤さんが世話人に質問したら、何もわからないという。なぜこのようになさんな大会要項の編集が行われたのか、きちんと説明してほしい。

□書評□

宮原武夫編著『船橋の歴史散歩』(崙書房、2000円)

川尻秋生(早稲田大学)

宮原武夫氏が編著として『船橋の歴史散歩』を刊行された。まず、このことを慶びたい。本来、書評は内容を紹介した後、評者の意見を述べるのが通例であるが、本書の場合、実際手に取られて読者が多いのではないかと思い、直接書評に筆を移したい。

宮原氏は、著名な古代史研究者、かつ歴史教育の研究者である。また、『千葉県の歴史』をはじめとする自治体史の編纂を主導され、地域史にも造詣が深いことは周知のことであろう。

「～の歴史散歩」と称する書物は、書店に行けば数多く目にすることができる。しかし、本書は、こうした一般的な歴史散歩とは異にする部分も多い。もちろん、市民向けであるから、船橋市内を13のコースに分け、見学に適する順番どおりに解説を加えてはある。

しかし、本書では一般的な史跡散歩ではなく、普通では見向きもされないような史跡や石造文化財に視線が注がれている。たとえば、各所に残る忠魂碑や石造文化財があげられる。評者からみて、実は、本書の最大の特長が石造文化財、そして戦争遺跡なのではないかと思われる。

こうした石造文化財について、もちろん従来からも研究が蓄積されてきた。例えば、歴史地理学では道標の研究があるし、民俗学では庚辰信仰をはじめとする民間信仰の研究が盛んである。また、歴史学としても、千葉県では全県的な規模での筆子塚の研究があり、近世の庶民教育の実相が解明されつつある。

しかし、研究がはじまりつつあるとはいえ、忠魂碑や戦没者の顕彰碑など、近現代の戦争関係の石造物に関する研究は、まだまだ立ち遅れている。本書がこうした点に意を注いでいることは一見して明らかであり、今後の近現代における石造物研究に先鞭を付けたといえるのではあるまいか。

従来の戦争に関する歴史教育は、政治・外交・経済などをマクロの視点から俯瞰している。これ

は、限られた時間、そして入試対応の授業からすれば、ある意味、仕方のないことかもしれない。

しかし、児童・生徒にとって、身近に戦争を実感できないという欠点を持っていることも事実である。こうした現状を幾分なりとも補完する授業を行いたいならば、現地で石造物を実際に調べ、読み、統計をとり、その内容を把握することは、十分価値のあることであろう。

さて、編著者の歴史研究、あるいは歴史叙述の裏には、研究史の深い「読み」がある。これは編著者の特色なのだが、研究史を整理した上で、その矛盾から新たな問題設定を行うという手法が、本書でも随所に活かしているように思う。

こうした著者の姿勢がもつともよく現れているのは、第三部「船橋の民間信仰」に収められた「狛犬の歴史」ではなかろうか。実は、この部分のエッセンスは、宮原氏が執筆代表を務めておられた実教出版社版の高校学校用教科書日本史Bの「史料の探求」に収められている。筆者の長年にわたる研究成果が遺憾なく発揮されているように思う。

もう一つ、本書の特長に、第四部「自由研究」がある。この部分は、学校の宿題として地域史をまとめることを想定して執筆されたと思われる、テーマの探し方から、調査の仕方などが詳しく紹介されている。小中学生には少し高度かもしれないが、高校生ならば十分参考になるであろう。

また、宿題を出す側の教員にとっても、地域史研究の手引きとして十分活用できると思われる。この部分をもとにして、船橋市域の地域研究・地域学習がますます盛んになることを願わずにはいられない。

最後に要望を一つ。本書には地名や固有名詞にルビが振られて読みやすいし、索引も完備しているから、索引から逆に本文に溯ることもできる。また、参考文献もあるから、さらに研究を深めることや、情報を集めることもできる。しかし、「編著」とあるのだから、宮原氏個人の執筆ばかりではあるまい。今後のためにも、誰がどの部分を執筆したのかという点を明示した方がよかったように思われる。

なお、本書とは直接関係ないが、船橋関係の興味深い新聞記事を紹介しておく。1872年4月29日、5月8・9日付け『東京日々新聞』には、船橋大神宮西側裏手から、唐の乾元重宝から明の永楽通宝まで13種以上の大量の古銭が掘り出されたとの記事がある。中世の有徳人の埋蔵銭であろうが、船橋地域の歴史を語る上では興味深い。こうした古い新聞記事を活用する探求方法もあるのではないか。

加藤公明・和田悠編『新しい歴史教育のパラダイムを拓く —徹底分析!加藤公明「考える日本史」授業』(地歴社、3150円)

鳥山孟郎(東京歴教協)

『新しい歴史教育のパラダイムを拓く—徹底分析!加藤公明「考える日本史」授業』をご恵贈いただきありがとうございます。私も加藤さんと同じ方向をめざして授業をやって来ましたので、自分の授業を振り返りながらじっくりと読みました。

加藤さんの授業観のポイントについては佐貫さんの論文がうまく整理してあると思います。加藤さんの授業を見た教師は誰もが生徒たちが生き生きと授業に参加していることに感銘を受けます。しかし、現実には佐貫さんが指摘している観点についての理解に欠け、すぐれた指導技術のためと考えている教師が多いように思います。

この観点を徹底して貫き通しているところが加藤さんの授業のすばらしい点であり、他の教師には容易に真似のできないところだと思います。私自身も一つの問題に4~5時間をかけたり、年間の授業時間の大半をこうした授業にあてるということはできませんでした。それはなぜだったのかを考えてみました。加藤さんの授業スタイルをより多くの歴史教師に広めていく上でいづらかでも役に立つのではないかとあって、気がついた点を書いてみたいと思います。

従来の一般的な授業観を変えていかねばなりません、特に次の3点は不可欠だと思います。
①教師が正しいと思う事実や解釈をすべての生徒に納得させるべきだという考えを捨てる。一研究発表に対する討論の場では、教師が正しいと考えるものとは異なる生徒の意見に対して、どのように指導すべきかという質問や意見が必ず出てくる。

②正しい答えを覚えるためではなく、自分なりの社会や歴史の見方をつくり上げていくために歴史の授業があることを生徒自身が感じとれるようにする。—普段は講義中心で、たまに生徒に意見を出させようとしても、生徒は全く乗ってこないと嘆いていた教師がいたが、生徒の授業に対する見方を変えることができなくては、生徒の積極的な姿勢を引き出すことはできない。

③生徒が問題意識を持って、考えを深めていけるようなテーマと教材を用意する。—歴史についての深い理解、教材についての広い知識、生徒の歴史認識についての的確な現状把握を身につけるためには、教師自身の学習と経験の積み重ねが必要である。『歴史的思考力を伸ばす授業づくり』でも経験の浅い若い教師たちにとって、この点についての力不足が大きな壁になっていることを感じました。

以上の点については、私なりに取り組んでは来ましたが、加藤さんの徹底ぶりには遠く及ばないと感じています。そうってしまった原因の一つに、1年間の授業によって歴史の全体的な概観をつかめさせたいという意識があったように思います。程度の差はあるけれども、どの教師にもあることだと思います。その問題をどのように乗り越えていけばよいのかが、私の経験の中では見えてきませんでした。

上記①の問題に関連して、佐貫さんの論文の後半部分について疑問に感じている点があります。「こういう価値観(歴史像)を獲得してほしいという教師の『意図』」に対する「ある種の『断念』と呼ぶことができるものが自覚的に組み込まれている」として、その理由を「生徒の思想形成の自由を保障すること」にあるとしています。私の見方は少し異なります。

教師の立てた目標をすべての生徒に完璧に獲得させようとするのでは実際の授業は成り立ちません。いつも「断念」してばかりいなくてはなりません。生徒各人が学習する以前に比べてどれだけ向上したかを見ていくことが大切です。

また、「教師による選択、獲得すべき価値観にかかわる教師の指導やイニシャティブ」を否定しませんが、生徒の意見を評価する基準は「価値観」だけではありません。より多角的な視野で客観的な事実に基づいた判断がなされているかということも重要な問題だと考えています。教師が期待する価値観と同じであれば事実の意味することを読み違えていたり、単純な浅い考えであっても構わないというものではありません。

韓国の植民地化の是非を一例としてあげれば以下のようなケースが考えられます。

- | | |
|--------------------|------------------------|
| (1) 支配された人たちが可愛そう | (a) 韓国に近代的な制度や産業をもたらした |
| (2) 多くの人々が困窮していた | (b) 日本の工業化や国力の強化に役だった |
| (3) 日本への反感や抵抗が高まった | (c) 抵抗をおさえて治安を安定させた |
| (4) 民族自決の理念に反する | (d) 当時の大国はどこも植民地を持っていた |

これは(1)→(a)→(2)→(b)→(3)→…と相互批判が展開されると想定したモデルです。生徒の認識のあり方や成長を問題にする場合に、(1)の理由だけを挙げて植民地化に反対する生徒よりも、(a)(b)の理由を挙げて賛成する生徒のほうがすぐれていると思います。(1)だけの生徒が(a)(b)の理由を知って賛成に変わる場合もあります。賛否いずれの立場の場合でも多くの理由を挙げられる意見の方が説得力があります。重要なことは賛否どちらの意見の方が正しいかではなく、相手に反論できる論拠をどれだけ示すことができるかにあると思います。認識の深化というものには賛成から反対に移るのではなく、反論できる論拠をさまざまな角度からより多く示せるようになることにあります。その過程で反対から賛成に移る生徒もいるし、その逆の場合もあるでしょう。

このケースに関しては賛成論も反対論も決定的に相手を納得させる論拠は存在しません。最後は生徒たちに「韓国人の友人に自分の意見をどのように説明しますか」と問いかけるしかないと思っています。

『歴史的思考力を伸ばす授業づくり』は生徒たちが主体的に歴史を考え、判断していく授業にするために、教師が何をすべきなのかを各教師がそれぞれの経験を通して見つけだしていくための踏み台を提供しようとしたものです。本当にその役割が果たせるものかどうかはわかりませんが、考える材料の一つになればと願っています。

蓮池透さんの講演を聞いて

遠藤 茂(船橋支部)

<話し合いか制裁か>

9月17日敬老の日に、全国教育会館で蓮池透さんの講演会が行われたので聞きに行った。日朝平壤宣言10周年の記念講演会で「日朝国交正常化と拉致問題」と題して行われた講演会は、会場に用意された椅子が足りなくなるほどの参加者であった。

蓮池透さんは、弟の薫さんが日本に一時帰国した時期から話を始めて、完全帰国までの家族での話し合いから政治家の無責任な対応、さらに残りの人たちの帰国の可能性について話を進めていった。他の講演などでもよく思うことだが、外から見ている我々のような一般の人間のイメージと当事者の実態とは、大きな隔たりがある。まず話題としたことは、家族会から除名されたことであった。蓮池さんは問題の解決には日朝の話し合いが必要だという考えであったが、家族会の中では賛同者が無く裏切り者扱いを受け、ついには除名に至ったということであった。しかし、いくら経済制裁などの強い圧力をかけても事態が進展しない現状を考えると、圧力だけでは北朝鮮を話し合いのテーブルに着かせることはできないと一部の人は感じてきているようだと言った。家族会や政府の一部には圧力をかければ北朝鮮政府が困って、日本に頭を下げて話し合いを求めると考えている。それに同調する政治家もいて、ますます話し合いのパイプが無くなってきているというのが今の状態である。『週刊金曜日』2012年6月15日号に横田夫妻のインタビュー記事が掲載された。その中で次のような発言をしている。

早紀江:通常の国家間の外交と同じようには行きません。そうであるならば、日本政府は制裁一辺倒ではなく、交渉がスムーズに行くような施策を講じてほしい。その中でパイプをつくり定期的に会議のテーブルを設けるなどして拉致問題解決への糸口をつかんでほしい。

滋:拉致問題があるから朝鮮学校を無償化の対象から外すとか補助金の対象から外すとかは、それは筋違い。正しい教育はすべきですが、教育と拉致は別問題。

早紀江:北朝鮮は難しい国ですが、拉致問題が解決できないのは北朝鮮だけに問題があるのか、わからなくなってきました。日本国内にも解決を遅らせるようなものが、どこかにあるのではないのでしょうか。

これを見ると蓮池さんの主張してきた話し合いを進めることが、拉致問題解決の早道となるのではないだろうか。

<親をとるか子どもをとるか>

はじめは一時帰国の約束で帰国してきた。しかし、薫さんのようすを見ていて絶対に北朝鮮に戻してはならないと思った。なぜなら薫さんのようすから北朝鮮に戻ったら二度と日本には帰ることはできないと確信したからである。しかし、子どもたちは北朝鮮に残っている。親のために日本にとどまるか、子どものことを思って北朝鮮に戻るか、薫さんは煩悶の状態だった。決断できなかった。「家族会」と「救う会」のだれもが北朝鮮に帰るのが筋であると考え、日本にとどまらせようと言いつける者がいなかった。一人透さんだけが日本にとどまるように必死に説得した。

<期待が裏切られた後の北朝鮮での生活>

薫さんは北朝鮮に拉致された後、4~5年の間は日本から救いが来ると信じていた。しかし、その後は救いが来ないと確信するようになった。その結果、北朝鮮で何とか生き延びようと必死で、特に子どもが

生まれた後は子どもたちが安全で安心できる立場に立たなければという思いが強くなった。そのため絶えず人々の顔色を読み、心の動きを読むようになったそうである。絶望の中で生き続ける選択をした薫さんの心情を考えると、胸が痛む思いである。透さんは弟との話し合いの中で帰国させない選択をしたのである。

<政治家とマスコミの対応>

一時帰国していた時に、当時官房副長官だった安部晋三さんは、北朝鮮に帰そうと考えていた。しかし、安部さんに対して透さんは帰さないことを強く主張した。また、官房長官だった福田康夫さんは、家族会の人々に“拉致された人たちはすでに死亡している”と伝えてきた。透さんは、この2人の元首相経験者を嘘つきだと言っている。なぜなら、9月17日朝日新聞朝刊に二人のインタビュー記事が大きく掲載され、安部さんは“一番厳しかったのは2002年、官房副長官として私が主導し、帰国した5人の被害者を北朝鮮に帰さず、日本に残す判断をしたときです”と語っている。また、福田さんは“小泉首相の訪朝で、拉致被害者の一部が死亡といわれた衝撃が大きくて、その後の交渉は拉致問題に収斂してしまった”と語っている。まったくの詭弁と他人事のような発言である。マスコミはこうした政治家の発言を検証することもなし、帰国できない状態の責任を問うこともしていない。蓮池さんはそうしたマスコミにも深い不信感を持っているようであった。

<帰国後の日本での生活と不安>

帰国後は支援金として、月大人13万円、子ども5万円ほどが、5年間の約束で支給された。生活保護と同じシステムで収入があると支援額が減らされる。この額は日々の生活をするだけのもので、北朝鮮での長い拉致生活に報いる金額ではない。しかし、税金で養われているとか税金で教育を受けているといった、心ない手紙がたびたび送りつけられた。5年経って支援継続の申し出をすれば継続して支援を受けられるが、断った。いわれのない非難や心ない発言にこれ以上耐えられなかったからである。本来なら北朝鮮に賠償請求をして、解決するまで政府が一時金を一括して肩代わりしてくれるのがよいと考える。家族会などは賠償金を持ち出すと、5人とその家族の帰国で拉致問題が終わってしまうのではないかと不安に思っているが、実際は逆ではないか。賠償の話に筋道をつけ帰国後の生活プランを示した方が、帰国しやすいし安心できる。

<今後の道筋>

最後に、蓮池さんは拉致問題解決の方向についての意見を述べた。北朝鮮国内に戦前戦中に埋葬された遺骨の収集を、北朝鮮政府から打診されている。8月13日朝日新聞朝刊に「遠い故郷 帰れぬ遺骨」と題された記事が掲載されたので、知っている方も多いのではないかと思う。わざわざ北朝鮮側から申し出があったのだから、こうした機会を積極的に利用することである。特に民主党政治家は北朝鮮とのパイプを持っている人物が少なく、交渉が手詰まり状態になっているのだから。平壤宣言から10年たったが、その間政府は何もやってこなかった。そのため北朝鮮からの申し出にもかわらず“拉致問題も当然議題となります”と早々に発言している。北朝鮮当局の申し出にうまく乗るのではなく日本の思惑の押しつけをしようとする、両方もうまくいかなくなる可能性がある。政府の焦りを感じる。日本政府は、拉致問題は北朝鮮次第だと下駄を預けて、頭を下げてきたら話し合つてやるといった姿勢でいる。その上、制裁の一環としてサッカーチームの入国拒否や朝鮮高級学校の無償化拒否など、拉致問題とは関係のないことで圧力をかけている。北朝鮮にとっては単なる嫌がらせとしか受け取れないだろう。八つ当たりのような行動である。相手の責任にして何もしない態度では何も動かない。経済制裁も同じで、北朝鮮にはいくら圧力をかけられても参りましたと頭を下げることは決してない。経済制裁で一番喜んでいるのは中国ではないか。北朝鮮の通商貿易をほぼ独占しているのだから。日本は勇ましい姿を国民に見せ、パフォーマンスをして思考停止状態になっている。国民受けするだけの効果しかない。経済制裁で懲りなければ先制攻撃を行い、それでも頭を下げなければ核武装して脅してやれ、といった流れになるのではないか。政治家は拉致被害家族と同じレベルで騒いでいるのではなく外交をしっかり進めてほしい。